

# フ レ ー ベ ル の 生 涯

お茶の水女子大學講師

津 守 眞

幼稚園の創始者として知られているフレーベルは、  
いかにして幼児教育の道に志したのか、又彼はどのよ  
うな人間だったのだろうか、それを明らかにするため  
に彼の生い立ち、その生涯を辿ってみようと思う。

## 一 幼年時代

フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フレーベルは、一七八二  
年四月二十一日チューリンゲンの森のほとり、オーベルワイ  
スパツハというシュワルツブルク・ルードルシュタットの一  
村に生れた。ドイツは森の国と云われるが、チューリンゲン  
は中でも最も代表的な森であり、オーベルワイスパツハはそ  
の森林地帯の中の高原にある小さな村である。父はヨハン・

ヤーコプ・フレーベルと云い、旧ルッター派の牧師で、その  
村の主席僧侶だつた。兄が四人と姉が一人あり、フレーベル  
はその第六子として生れた。母はフレーベルの生後間もなく  
病氣になり、彼の生命を九カ月育くんで亡くなつた。彼の生  
涯の波瀾は既にこの時から訪れたのである。母の死はその後  
長く彼の心の上にいろいろな形で影響を与えた。父は近隣の  
多くの人々の魂の世話を一手に引き受けていたので、極めて  
多忙であり、自ら育児や教育に携わる暇がなかつたので、母  
の死後フレーベルの世話は召使に託されたのであるが、召使  
は父の多忙にかこつけて十分その責務を果たさず、彼は年上の  
兄弟達によつて育てられた。そういうわけで、彼には「母が  
なかつたと同様に、正しい意味では父もなかつた」のである。

一七八五年、四歳に入つた時に、父は再婚し、二度目の母が来た。最も愛情を求める幼児前期に、すべての愛情を注いでくれる母なくして育てられたフレーベルにとつて、新しい母親の出現は一大事件であつた。彼は真心をこめて子供の愛を母に献げた。そしてその感情は酬いられ、彼の幼児期における最も幸福な、楽しい数カ月を過すことが出来た。しかしこの幸福は長くは続かなかつた。翌年母には新しい男児が授けられた。それと共にそれまではともかくもフレーベルに向けられていた愛は全く新しい子供に向けられ、フレーベルに対しては無関心な態度をこえて、邪魔物扱いにさえした。彼はもはや、この母の子供ではなく、全く他人として扱われるようになってしまつたのである。フレーベルが丁度五歳の時である。一応周囲の事物に対する判断がついてきた時期、その時期にこのような体験をすることは傷ましいことだつた。「私は少年時代の初期に既に全く孤独を感じ、そして私の魂は悲哀に充たされていた。」と自伝にも記されている。この体験はもともと内向的であり、敏感な彼の心に一層拍車をかけた。環境は激しく彼の生活に迫つて来たのである。母親とフレーベルの間の此の様な葛藤を利用して、母親のことを彼に悪く告げる人もあつたし、又無実な罪を負わされ、不当に罰せられることも屢々あつた。子供の心にとつては耐え難いようなこうした事柄に囲まれて、彼の闘いは自己の心の

内部に向つていつた。自己感情と道德的自負心が彼の心の中に芽生え、外的活動ではなくて内的活動に沈潜するようになった。この時に培われた自尊心と、冥想癖とは生涯を通じての彼の伴侶となつたのである。屋敷と教会とに囲まれた庭から生籬ごしに山を眺め、又頭上の空を仰ぎ、山地の新鮮な空気を呼吸しながら、一人ぼつねんと立つてゐる、年よりはませた、内向的な少年フレーベルの姿を思い浮べることが出来る。

フレーベルの父は前述の様に牧師であり、厳格にして真面目な人間だつた。朝晩家族の全員が集まり、礼拝が行われたこの時間はフレーベルを宗教的冥想へと誘ひ、彼の宗教的感情を培つた。それによつて彼は「飽くまでも勇敢になりまた善良になりたいと繰り返し繰り返し、且つまた深く感動した心を以て、」少年らしい決心をした。

## 二 少年時代

一七八九年、満八歳になつた時、彼は村の公立学校にやられたが、間もなく父の意見によつて、女子小學校に通うことになつた。此の學校には「清楚と安靜と優雅と秩序と」が支配しており、内向的な彼の心には全く適していた。以下少しく彼の少年期の経験に触れてみよう。

此の女子学校への入学は彼にとつては「一層高い精神生活への誕生であつた。」此の学校では毎週聖書の文句を一章ずつ暗記することになつてゐた。最初の週に彼に決められた文句は、マタイ伝第六章の「汝先ず神の国を求めよ」云云の一句であつた。此の句が莊嚴な調子で唱えられる時、彼は心の中に深く生命の基礎と救済とを印象づけられた。そしてつと後年になるまでこの印象は生き生きとして保たれて、彼の心に勇氣を与えた。日曜日に歌う讚美歌も亦深い感激を与えた。「わが心も靈も高く昇れ」「基督者たることの尊さよ」の二つは特に印象的であり、「恰かも二つの輝やく星のように」彼の「幼い生命の暗いそして怖ろしい黎明を照した。」毎週月曜日にきく父の説教、それは比喩的、直観的な言葉が多く、難解なものではあつたが、發達途上にある若い心情にはかえつて直観的に容易に把握されることもあつた。そしてその説教において語られたことは彼の心の糧ともなつた。フレーベルの思想に流れる宗教的傾向の源を、少年期のかかる経験にまで追及することが出来よう。

父の家には多くの人々が悩みを抱いて相談に來た。フレーベルはその間に起る出來事を屢々目撃し、「切り刻まれて重荷を負い、引裂かれ寸断された人間の生命が、この五千人の社会生活において、彼等の真面目なそして嚴格な牧師の注意深い眼の前に如何に現われて來るかを見た。」彼らの問題は

大概夫婦關係や性的問題だつた。そして少年フレーベルの心には何故に人間のみ男女に分れて作られており、その故に多くの苦惱が生れるのかという疑問と悲哀とが生じた而るに或る日、彼が榛<sup>はしばみ</sup>の蕾に紫の蕊のあるのを見つけて喜んでゐると、偶々帰省してゐた長兄のクリストフが、花にも両性の區別があるのを注意してくれた。これによつて、性の區別は人間にのみあるのではなく、全自然界に拡がつてゐるということを知ることが出來た。そしてそれ以來、人間の生活と自然の生活とは彼にとつて不可分離のものとなり、彼の疑問は解決された。幼時より森林地方の美しい自然に触れ、人間との交わりよりもむしろ自然との交りを好み、自然と触れつつ自己の心の奥へと沈潜していつたフレーベルであつたが、今や彼の心には人間界と自然界とが根本的には同一の法則が支配してゐるという觀念が臆げながら生れて來たのである。そして四十年たつた後に至るまでも榛の花を見れば、それが天使のように自然という大きな神の宮居を開いてくれるように思われた。

此の頃長兄のクリストフは大学に在學し、神學を學んでゐた。父は旧式の神學者であり、兄はその頃盛になりつつあつた批判哲學に影響され教義に對しても批判的な態度を持つてゐた。そのために兩者の意見は屢々相違を來した或る日のこと、宗教上の問題から、父と兄との間に爭論が起り、父は激

昂して一步も譲ろうとしないし、生れつき穩かな兄も燃えるように赤くなつた。二人とも共に、それぞれ真理とすることを固持して譲ることが出来なかつたのである。その後も屢々父と兄との間には論争が展開された。フレーベルにとつては兄の方が正当と思えたが、父の見解も又誤りとは考えられなかつた。これらの論争を通して、彼は「いかなる謬見にも、屢々それを發作的に固執するまでに人を釣り込む真理の一面があり得るということを仄かに悟つた。」そしてその後決して何れか一方に味方するということをしなかつた。一面、極度に内向的であり、偏屈にすら見えるフレーベルにおいて、少年期におけるかかる体験の敘述を見ることが出来るというのは、彼の心の中に本質的に育くまれている素直さを示すものではないだろうか。

父が牧師である關係上、「基督を身に休し、基督の生活を實現する」ということは屢々父から要求され、語られて来た彼も又それを非常に大切なことと思つてはいたが、それを果すことは困難であり、不可能であると思つていた。その矛盾がいかにして解決されたかは明らかではない。恐らく、彼獨特の直観によつて感得したのである。「人間の本性そのものは元來人間をしてイエスの生活を再び純粹に生活し且つ實現することを不可能ならしめるものではなくて、却て人間は若し彼がそれへの正しき道を歩むならば、純粹なイエスの生

活を獲得することが出来る」と知つた。そしてこの思想が後に彼の「生涯の眼目」になつたのである。

此の間にあつてフレーベルの家庭における生活は決して安定したものではなかつた。家庭の冷い空氣は彼の身にひしひしと迫つてきた。以前にはただ内向的に沈潜していたものが彼の心身の發達と共に次第に明瞭な形で表現されて来た。彼の心には以前よりも一層明らかな形で、価値判斷が育くまれて来たし、自我意識が現われて来ていた。異母弟妹と遊んでいる時に、そのいたすらはすべて彼の責めとなつたし、母はすべてのことにおいてフレーベルを悪く云い、父は事情を調べる暇がなくそれを信じた。彼は「とうとう嚴罰を怖れて、最も無邪氣な行爲をさえも隠すか、或いは尋ねられた時に平気で不實のことを述べ立てるようになった。」少年の生活において、この様な環境は最も慘めなものであり、不健全なものである。それは少年を不健全な心情に導びくささい水である。フレーベルの心は内的反省に絶えず向つていたから、極端に外面的反抗に走ることはなかつたが、それでもその生活は憂鬱なものであり、何処にか救いが求められねばならなかつた。長兄クリストフは此の様な時期にあつて、常に弟の辯護人となり、理解者となり、楯となつてくれた。フレーベルとこの兄とは、この後しつかりと結ばれることとなり、フレーベルは何か事ある毎に此の兄に相談をし、又兄はその後

ずつと死に至るまで、フレーベルの良き理解者であつた。丁度此の頃、この苦窮のフレーベルに全く外部から救の手が伸ばされた。それは、偶々母方の伯父ホフマンがフレーベル家を訪れた。此の伯父は経験に富んだ、優しくて愛情に充ちた人であつたが、彼は直ちに此の家におけるフレーベルの立場を看破した。そして出発後直ちに、フレーベルを引渡すように父に乞うてきた。そして父は又喜んでこれを承諾した。

一七九二年、満十一歳の暮、彼はシュタットイルムの伯父の許に引きとられ、そこから同年輩の少年達の学校に通うこととなつた。此の時から約五年間、フレーベルにとつては、比較的楽しい幸福な生活が恵まれた。「父の家には厳格が、そして此処には溫和と親切とが支配していた。彼処では私は私に關して不信用を見たが、此処では信用を見た。彼処では私は束縛を感じ此処では私は自由を感じた。」と云う自伝における述懐は、彼が此の伯父の許で如何に以前と比べて安定した生活を送ることが出来たかを物語るであらう。今や彼は「此処で長い息をついて新鮮な生命力を吸いこんだ。」彼は「心情の自由を得、そして身体は強健になつた。」世界は彼がそれを充たし得るだけ彼に解放されていた。内面的にのみ偏つていた彼の性格に、外面的な活動の自由と機会とが与えられた。

伯父はやはり牧師であり、シュタットイルムの地方監督を

していた。日曜日には彼は伯父の説教を十分に聴いた。彼の説教はその人格や生活と同様、「靜かで、穩かで、愛情に溢れていた。」

此の時代における彼の大きな楽しみの一つは、学校の宗教教授の時間だつた。伯父に云わせれば、それは「余りにも哲學的であつて、この程度の者には往々理解が困難」だつたけれども、「この教授は十分に私を啓蒙し、生氣附け、溫めゐなせどころか私を灼熱させたので、特にイエスの生涯や仕事や性格が述べられる時には、私は屢々内面的に本當に燎かされたのである。その時私はさめざめと泣き、何時かは私もこれに似た生活を送ることが出来るという、いとも確固とした憧憬が私の心に充ち満ちた。」と自伝に語られている父の家において培われた宗教的感情は寧ろ、激しいものであつたが、伯父の家ではそれに人情味と柔かみが与えられ、更に青年期に入つて浪漫的な傾向が強くなると共に、その宗教的感情が自分のものとなり、血が通つて生き生きと動いて來たと考えられよう。

学校休暇中に時たま両親の家に歸る時より他は、このようにして大部分が伯父の家で過され、愉快な学校生活と、そして靜かな平和な家庭生活とを味わいつつ、數年間が過ぎた。乍併かかかる平和はいつまでも味わつていられるものではなかつた。成長と共に、今や新しい波瀾が彼を待つていた。

### 三 林業見習

彼は何か市民的な職業に就かねばならなかつた。彼自身はもつと學問を続けられる様な道を選びたかつたが、上の兄二人が既に學問に身を委ねていたので、フレーベルには學問をさせない、ということとは既に継母の意志によつて確定されていたものだつた。当時最も生活の安定する確實な職業は、大藏省か稅務局の官吏であり、その職を得るには、その下級官吏の書記になつて入るか、又は最高官吏の召使になつて入るか何れかであつた。父は此の職業に彼を就かせようと思つたが、前者の道は種々の事情から不可能だつた。併而後者の道は彼の自尊心が許さなかつた。そこで彼の希望が考慮されてウィッツという林務官の徒弟となり、農業に志すことになつた。フレーベルは山野森林を好んだ。そして農業を職とすることに大きな喜びを抱いた。

一七九七年夏至の日、十五歳三カ月の時、フレーベルは林務官ウィッツの弟子入りをした。ウィッツは能力はあつたが人を教える術を知らず、その上、仕事の忙しさにかまけてフレーベルに約束の教授をしなかつた。このことは反つて彼にとつては幸いだつた。彼は全く自由な時間を此處で得ることが出来た。此の間の生活は自伝に述べられているように、「第

一には比較的家庭的なまた實際的な生活、次には自然特に森林における生活、次には数学や語學に献げた書齋における生活、次には植物學に献げた生活である。」此の間にあつてもその生活は隱遁孤獨であり、冥想に耽ることを好んだ。そして自然と森林とは彼の最も良き友であつた。

一七九九年の夏至の日、此の徒弟期間は満期になつて、彼はオーベルワイスバッハの家に歸つた。

### 四 イエナ時代

偶々イエナで醫學を專攻している兄に急に送金せねばならぬということが起つた。そこで丁度仕事をしていなかったフレーベルが使いにゆくことになつたが、大學の活氣ある生活に打たれて暫らく滞在することを父に乞ひ、その希望は容れられた。その頃イエナ大學ではフリードリッヒ・シラーが歴史學を担当し、シェリングが哲學を講じて居り、大學は極めて活氣を呈していた。彼の知的要求はかかる環境にあつて、次第に強烈となり、更につづけて勉強することを父に乞うた。その專攻希望は財政學であつた。不十分な母の遺産を學資にするということ、どうやら此の希望は容れられた。

イエナにおける講義は彼にとつて必らずしも満足できるものではなかつたが、多くのものが与えられた。特に余體を内

的關聯において捉えなければならぬ、という思想は此の間において把握されたものであつた。又イエナ滞在中に、自然研究の団体と、鉱物学団体と二つの学術団体に属し、彼の学問的情熱が呼び醒まされた。

かくて一年半靜かな学窓生活を送つた時、経済的困窮が彼を襲つた。兄に貸した手形の一部が返してもらえず。そのため学費が続かなくなつたのである。のみならず食堂から借りた金が返せなかつたため、当時の大学の規則に従つて大学の監禁室に入れられた。始めは父が助けて仕拂つてくれると思つていたが、継母が父の不機嫌をかき立て、遂に九週間を監禁室で過すこととなつた。その罰は、大学裁判の席上で父の遺産相続の權利を放棄すると云つたのが父を満足させたことによつて、許されることとなつた。

一八〇一年夏、彼は重苦しい胸と暗い心情と圧迫された精神とを抱いて、両親の家に歸つた。

父の家に歸つて数カ月の後、ヒルトブルクハウス地方の農場に実地見習に出たが、それは余り興味を引かなかつた。此の間にあつて彼の心を痛めたものは、屢々見られた様な父との間の無理解であつた。彼は父を尊敬していた。老齡に至つても尙、真面目な堅い説教をなし、嚴肅な意志を持つと共に高尚な犠牲的精神に充ちて、真理と道德と正義とのために闘ひ続けていた父の姿を、彼の真率な心は崇拜せざるを得なかつた。

つた。而るに自己の内的な努力と傾向とを父が理解してくれないといふことは、純真な青年にとつて大きな悩みだつたに違ひない。「父は老いていて墓場に近いといふことを私は知つてゐた。さればこそこのような父に理解して貰えないことは、私にはいとも悲しいことであつた。私は父を愛した。そしてこの愛が齎らす恵を屢々感じた。」と彼は述べている。彼は自己の内心を父に手紙で知らせようと思つた。丁度その頃に、父は病に倒れ、彼は家に呼び戻された。そして此の最後の時になつて、手紙で伝えられる筈だつたものが、直接に言葉により、眼によつて伝えることが出来た。一八〇二年の二月、此の父は臨終の際までフレーベルの行末の心配を胸に懷いて逝つた。

彼は今やあらゆる点で自由の身となり、自分の生活を自分で決めることの出来る身となつた。丁度二十歳の青年であつた。内向的にして自己反省的な悩み多き青年フレーベルは何ものかを求めて魂の放浪を始めるのである。

## 五 職業彷徨

その年の復活祭に、彼はバンベルクの近くにある税務・山林・十分の一税局へ山林書記となつて赴任した。この地方は極めて美しい土地であり、彼はその自然を満喫した。偶々

長官の家の家庭教師と意気投合し、親密に結ばれることとなつた。此の友人が後に彼の運命を拓く媒介となるとは極めて奇しき邂逅である。さて此の書記の仕事は、極めて楽しい境遇を彼に提供したにも拘らず、彼はそれに満足することが出来なかつた。彼の求めて已まない精神は、外的境遇の安定に留まることは出来なかつたのである。

一八〇三年の春の初め、彼はこの地位を棄ててバンベルクの土地測量の仕事に携わつた。その間に彼はシェリング派の若い哲学博士と知り合い、シェリング著「ブルノー或いは世界精神に就いて」を勧められて読み、強く印象づけられた。或日二人で絵画館を見物した後で、友はフレーベルに云つた。「哲学には君、用心し給え。哲学は君を疑惑と闇とに導いて行くよ。」フレーベルの極度に内省的な性格と、人生の真理を求める真剣さに、哲学がどの様に作用するかを、此の友は明らかに見て、危惧を感じたのであろう。

バンベルクの仕事は外面的にも、必らずしも彼にとつて安定した職業ではなかつたので、もつと確実な仕事を彼は欲した。偶々新聞広告に応じて、建築上の作品を送り、それが認められて、メクレンブルクリシュトレリッツの長官、フォン・デヴィッツの個人秘書の地位を得た。

一八〇四年の嚴寒物凄しい二月の冬の日、彼は駅運馬車に揺られて赴任の途に向つた。ここで彼は歓迎され、大きな農場

経営の会計を親しく見学する機会が与えられた。此の仕事は不満足なものではなかつたに拘らず、彼の心の内には早くも「従わずにはおられぬ一つの星が昇つていた。」彼にはかかる地位はどうしても本職として考え難く、何か他に自分の打ち込む本業が見つかつたら、それを捨てるべく運命づけられていた。

丁度その頃、彼を心から愛してくれた伯父が死んだ。此の伯父は彼の母の兄であり、彼女を心から愛し、又フレーベルを心から愛していた。そして彼に対して遺産を少し残してくれていた。フレーベルの興奮し易い性質、外見移り気の安定しない性情を心配していたのであろう。彼は長兄クリストフに対し、フレーベルが、「今占めてゐる地位を決して捨てぬように阻止するために全力を尽くせ」と命じた。それにも拘らず、彼の精神は「忽ちまた一層高い教養の必要をいとも痛切に感じた。」彼によれば、「神意の望むところ」は伯父の意見とは違つていたのである。

これより少し前より、彼は教学者であり、物理学者であるウォルワイデ博士と会うことにより、科学に対する情熱を目覚められており、次第に建築術に志すようになっていた。偶々前述の家庭教師である友人がフランクフルトで建築業の就職の斡旋をしてくれるという話になつた。所がその旅費の工面の点で彼は困却し、常に彼の理解者である長兄のクリストフ



に手紙で援助を乞うた。彼の心には些かの遲疑がないではなかつた。余りに職を移り易い心は此の立派な兄をも怒らすかもしれない。兄の返事が来ても、それを開封するまでに數時間、それを読むまでに數日間、彼はそれを持ち廻つた。數日間希望と疑惑との間を動搖した後、開封した彼は、そこに極めて同情的な言葉と、それから愛する伯父の計畫と共に遺産のことが記されてあつたのである。「今や決定の關は投げられた。」

一八〇五年四月末、満二十四歳を迎えて、彼は今までの地位を放棄し、將來の建築師として、すべての友に別れを告げて、ウツカーマルクに親友を訪ねた。此の美しい土地で、彼は未來への希望に燃えて、「花から花へと胡蝶のように楽しく飛び廻つた。」彼は「自然の彩られたそして真珠で飾られた衣裳そのものを心から愛し、そして私の青年らしい歓喜を以て心から自然に愛着した」とその希望に満ちた喜びを記している。彼には今や畢生の仕事が定まつていた。それは「人間の生活を矛盾から解放する或る美しい、確實な、單純な道」、「人間そのものを再び『平和』ならしめるような道」、その道を求めること、であり、そして外的な意識は建築業に向つていた。その頃友人が記念帳に何か書いてくれと頼んできた。彼はそれに、次のように書いた。

「君は人間に食物を与えよ。人間自身に人間を与えること

こそ私の努力であつて欲しい。」彼は自分で書きそして云つたことが分らなかつた。もし解つていたら、それほど強く建築師になることを固執し得ただらうか。

美しい春の季節の幾週間かの旅行の後、夏至少し前彼はフランクフルトに着いた。そして彼の建築師の希望は近く実現される運びとなつた。それと共に、彼の心の中は再び動搖し、心の中に自問自答し始めた。

「如何にしてお前は建築術に依つて人間としての甲斐ある活動が出来、また人間の教育と人間の向上とに尽くすことが出来るのか。」

「この間に対して私は自分の氣の落ち附くようには答えたが併しこの職業において右に述べた目的に適うような結果を収めることの如何に困難であるかということをば、私は如何とすることが出来なかつた。」と彼は自らその當時を顧みて述べている。

丁度その頃、彼の件の友人は、フランクフルトに創立された模範学校の當時の校長たるグルーナー氏にフレイベルを紹介した。そこには若い教師達もあり、忽ち人生の種々の話題に及んだ。彼は打ち明けて話し、自分のありの儘の姿、自分について知つていることも知らないことも皆な話した。するとグルーナーは彼の方に向き直りながら云つた。「おお、あなたは建築業はお廢しなさい。それはあなたには適しません

教師におなりなさい。私の学校には教師が一人欠けています。御同意でしたらこの地位はあなたに上げます。」と。偶然にもその時、或る人に託してあつた彼の証明書の全部が紛失したという通知を受け、就職の上の困難も来した。彼は今や「神意そのものが、このような事情に依つて私の爲に退却の橋梁を破壊したのだ」という風に考え、それ故に長く躊躇することなく私に差伸ばされた手を勇み喜んで掴み、そして間もなくフランクフルト・アム・マインの模範学校の教師になつた。」

青年フレーベルの不安定な精神の動搖は一応此処に解決を見出したかに見えた。始めて九歳から十一歳までの三四十名の男児から成る学級を持つた印象を、彼は早速兄クリストフに手紙で送つてゐる。

「私は何か自分でも知らなかつたもので、而も長く憧憬し長く見失つていたものを發見したような、また終に私の生命の要素を見出したような気がした。私は水中の魚・空飛ぶ鳥のように幸福である。」

## 六 教師を志す ペスタロッチ訪問

廿四歳にして始めて教師の職を天職と意識し自覚したフレーベルの戦いはこれで終末を告げるであらうか。否。かくも

動搖し、究極のものを追い求めて彷徨つた魂が、一応の安定点をここに見出したとしても、それでその遍歴が終ることは考えられない。彼は更に自己の向上と、教育における窮局のものを求めて遍歴の旅を続けるのである。

教師を志したフレーベルは、三日後にはもう、かの偉大な教育者ペスタロッチに教を乞うべく、イヴュルドンに向つて旅立つてゐた。彼の滞在は今回は僅かに四日続いたのみだつたが、もしもつと長くペスタロッチの許に留まつていたならば、彼のような気分のものにあつては、心臓も心情も精神も破滅してしまつただろうと告白している。彼はしかし同時に、すべてにおいて満足したわけではなく、教授法における種々の不統一、欠点を感じ、又、早くも当時のイヴュルドン学園の不幸な分裂の微かな徴候に気がついていた。イヴュルドンを辞してフランクフルトに帰る時、別れに當つてペスタロッチは彼の記念帳に次の文句を書いてくれた。

「人は自己の目的への道を、思索の焰と言葉の火花とを以て、切り開くのである。けれども彼はただ沈黙と実行とに依つて、この道を完了した自己をも完成する。」と。

グルーナーの許で教師をする傍ら、彼はホルツハウゼン家の三人の子供の家庭教師を依頼された。これらの経験を通して彼は始めて、今までただ主観的なもの即ち自己教育としてのみ知つてゐた教育を、初めて客観的なものとして見るこ

が出来た。それは彼も告白している如く、「確かに苦しかった行爲である。」

グルーナーの模範学校において、彼は自己の職業を見出しよく働らき、そして彼の教授ぶりは好評を収めた。外部的には何ら破綻の原因となるものはなかつた。「しかし一つの大きな学校の組織された全体には鞏固な形式があり、確實な承認された、外部的には予め時間と目標とに適うように規定され得る課程が有つて、総ては時計仕掛けのように互に噛み合つていなければならぬ。」而るに彼の目覺めた生命と精神とは、形式によつて化石してしまふことに堪え得なかつた。彼は当時アルントの「人間陶冶に關する断片」に共感を感じた。「その足をば神の地上に着け、自然の中に根を下して立ち、その頭は天まで高く聳え、そして天を直視しつつその真相を読み、その心臓は地上と天上、地上と自然との兩者の千態万状の生命と天上の晴朗と平和、神の地上と神の天上とを統一する人間を私は教育する。」というアルントの語は、當時の彼自身の姿を描いたものかの如く思われた。彼の心には、この模範学校に対する義務から解放されたいという希望が次第次第に芽生えてきた。校長グルーナーもそれを認め、彼は教師としての責任から解放された。学校退職と共に彼には新しい運命が待つていた。彼には常に古い型に満足出来なくなると、自己の向上を求めてその型を飛び出し、そして

又別の型が彼を待つてゐる、その止揚から弁証法的に彼の精神は發展するという経過を辿つてゐる。今まで彼が部分的に三人の子供の面倒を見ていたホルツハウゼン家では、全面的に面倒を見る家庭教師を求めており、その推薦をフレーベルに依頼して來た。乍而彼の探したような、活潑な内的生命を持ちながら同時に知識と世間的經驗を有つた人間は探し得べくもなかつた。自由と無拘束を強く望んでいた彼に対して、ホルツハウゼン家ではその家庭教師となることを要求はしなかつたが、彼はかかる数カ月を経た後、少年達に対する心からの愛を以て、母親のような真心ある世話をしてやることに価値を認めた。彼の申入れは感謝して受け入れられた。

一八〇六年七月、二十五歳になつたフレーベルは、ホルツハウゼン家の三人の子供と共に郊外の田舎家で生活を共にすることとなつた。此の生活に入るや否や、彼には又もや、自己の教育の欠陥を除くために大学教育を受け、それによつて自分を教育して教育者になりたいという願が強く起り、此の仕事を直ちに放棄しようとして、長兄に相談の手紙を出した。しかし今回は自ら思い留まつて、追つてその決心を長兄に告げた。そしてそれと同時に彼の心に教育及び教授に対する最高の自己活動が始まつた。彼の努力の対象となつたことは自ら共に生活することが眞正の教育であるといふはつきりした感情、及び、基礎教授とは何か、一般に教授の対象は何

であるかという疑問だつた。この間にあつて彼の念頭に浮んだ最高原理は、「総ては統一に基づき、統一から出発し、統一に向つて努力し、統一に至り、そして統一に還る。」ということであつた。彼は心から朗かにまた愉快に子供達と共に生活し、人間生活の養育は自然生活の養育と結合していることを悟つた。彼は最善の教育を与えるべく熱心に骨折つたが、しかし彼の当時の段階としては、彼の目標にまで達することが出来ないと感じていた。それと同時に、彼はペスタロッチの許で学ぼうと決心した。

一八〇八年、彼は三人の子供をつれてイヴュルドンに赴き、彼らと共に彼自身ペスタロッチの生徒となつた。ペスタロッチの許で過した二年間は彼にとつて実り多き期間であつた。此の間に彼はペスタロッチの息吹に朝夕親しく触れその教授法を徹底的に学んだ。しかしペスタロッチ学園には既に暗い蔭が射していた。教授法における不統一、不調和のみならず、「総ての善きものと悪しきもの、総ての有益なものと有害なもの、あらゆる長所とあらゆる弱点、あらゆる間隙とあらゆる充実、あらゆる我慾とあらゆる無我の献身は、ペスタロッチ並びにその友人達の所で」示された。

ペスタロッチの許で経験した内的統一性と必然性との欠乏は、彼を駆つて、更に知識を得るために、大学に入学しよう決心した。

一八一〇年、彼は三人の子供と共にイヴュルドンを去つた。

## 七 大學時代 鉱物博物館助手

一八一一年七月初め、満五年の家庭教師生活を離れて三十歳に入つたフレイベルはゲッティンゲン大学に行き、待望の学生生活に入ることが出来た。長らく宿望の生活を漸やく得た彼は、「今や自由であり、幸福であり、精神的にも身体的にも健全であり、快活であり、」彼の「内部と外部とは平和であつた。」最初言語学に、後に物理学、化学、鉱物学等の自然科学が彼の主たる興味の対象であつた。思う存分講義と研究と思索とに耽つて、「終日独りで暮した後、せめて落日の輝いている懐しい光でも浴びようもの」と、夕方遅く散歩に出掛けた。精神と身体とを強くする爲に、遅く夜中頃までもゲッティンゲンの美しい周囲を散歩した。星明らかな空は私の内心とよく調和した。」彼は心ゆくまでこの生活を味わつたのである。而るに又もや彼の生活には経済的破綻が萌して来た。そしてその時に又しても思いがけない所から援助の道が開かれた。それは、彼の母の妹である叔母が急死し、その遺産が彼に与えられたのである。前には母の兄が、今度は母の妹が、フレイベルに道を開いてくれた。彼の母は幼ない時

にフレーベルを残して去つたが、その代りにその愛する兄妹が、彼の行先を祝福してくれたとは、何と奇しき運命であるうか。

一八一二年九月、彼はベルリン大学に轉學し、主としてワイス教授の許で鉱物學を研究し、傍らブラーマンの學校で教師として働らいた。ワイス教授の講義は彼の心を強く捉えた。

一八一三年、ナポレオンの大軍が撃滅され、プロシヤはこれに對して宣戰を布告した。プロシヤの国内には祖國愛の感激に燃えた民族意識が勃興した。すべての人が戰爭を口に叫んだ。「祖國ドイツの過去の光輝と名譽とへの大いなる神聖な憧憬が若人の胸の中に炎々と燃え上り、」各處に義勇団が組織された。彼はプロシヤ人ではなかつたし、又戰爭に出る何らの義務もなかつた。しかし乍ら彼は思つた。「苟くも武器を執るに耐え得る青年が、兒童及び少年の祖國を血と命とを以て守りもしないで、彼らの教師と成り得るなどとは全然考えることが出来ない、」し、「また今卑怯にも怖れて退くことを憚らないような青年が、後年赤面することもなく、また彼れの生徒の嘲笑や輕侮を受けることもなく、その生徒を何等かの偉大な事柄や犠牲と獻身とを要求する事柄に感激させ得るなどとは考えることも出来ない、」と。彼は敢然リュッツォ軍の歩兵部隊に身を投じた。此の戰爭はフレーベルに生涯の友人であり、又同業者を結びつけた。それはランゲタ

ールとミッデンドルフの二人であつた。知人のない軍隊生活において、三人は忽ち意氣投合し、種々の事柄に就いて語り合ひ、人間及び人間の教育は彼らの散歩や戸外の生活において屢々且また多く話題になつた。

一八一四年七月、義勇軍は解散され、彼は軍隊生活を全く不満足の感情を以て去つた。軍隊生活は彼の要求していた内面的なものを何も与えなかつた。それと共にフレーベルはワイス教授の紹介によつてベルリン鉱物館の助手の地位を得た。滿されぬ心を抱いてデュッセルドフからベルリンに帰る途中、彼は「不斷の渴望的な憧憬を以て、」道すがら多くの美しい風景や花園を巡視した。その中に「エフ」という花園に立ちより、多種多様に彩られた花を眺めたが、どの花も彼の心に満足を与えなかつた。そして氣が付いたことは、そこに一本も百合の花がない、ということだつた。

以下自伝からその部分をそのまま引用してみよう。「私はその花園の所有者に『貴下の花園には百合の花はありませんか』と尋ねた。するとこの人は靜かに『ありません』と答えた。これに對して私が驚きの情を表わすと、彼はまたもや靜かに『誰もまだこの花園に百合の花のないのを残念がつた者はありません』と云つた。しかし茲に至つて私は自分が何を恋しがり、また何を求めているかということが解つた。このことを私の心は次の言葉よりもつと美しい言葉で言い表わ

することがどうして出来たろう。『お前は心臓の静かな平和と生命の諧音と魂の清澄とを静かな、明るい、単純な百合の花の姿のうちに求めている。』種々様々の美観を呈しているこの花園も、百合の花がなくては恰も統一と調和との欠けた、眼前を過ぎ去る雖然たる生活のように私には見えた。他の日は散歩をして田舎の或る家の庭に美しく咲き榮えている百合の花を見た。その時の私の喜びは大きかった。併しそれは一つの垣で私と分離されていた。』

## 八 カイルハウへ

一八一六年十月、約二カ年間のベルリン鉱物館の助手の地位を去つた。これより前一八一三年戦争直後、彼の最もよき理解者であつた長兄のクリストフがチフスで死に、此の年に未亡人は遺児の教育をフレイベルに託したのである。彼は此の報に接するや、大学教授招聘の榮譽もすべてを投げすて、愛する兄の遺児の教育へ、彼の夢である人間教育へと一目散に走つた。

一八一六年の晩秋、フレイベルは長兄の遺児三人に、次兄の子供二人を加えて、イルム河畔のグリースハイムに、「一般独逸教育所」という名で、教育事業を起した。十一月十三日、フレイベル三十四歳の時である。翌年には親友ラングタ

ールとミツデンドルフを加え、場所もカイルハウに移つた。子供の數も次第に増した。

一八一八年九月、彼は子供や兄弟の殖えた家庭の爲に主婦を迎えた。彼女はヘンリユッテ、ウイルヘルミネと云い、シユライユルマツヒヤーとフィヒラに師事した教養高き才媛であり、ベルリン鉱物館助手時代に、知り合つたものである。彼は「自然と兒童とに対する私と同じ愛と、教育と人間らしき生活の実現とに対する私と同じ高い努力的な心が、彼女を私に結合させた。」と云つてゐる。彼女は學園のすべての者から愛され、情愛深く待遇され、死に至るまでフレイベルとの愛情は濃やかであつた。時にフレイベル三十六歳、ウイルヘルミネ三十八歳である。

フレイベルは齡正に人生の半ばに至り、漸やく青年期的動搖を脱して、その心は固く教育に結びつき、以後は彼自身の教育事業に没頭する三十余年が続くのである。そして幼稚園が創設されるまではまだ二十年の歳月が必要だつた。以下暫らく簡単に彼のその後の生活と経歴を眺めてみよう。

一八二〇年まではカイルハウ學園の設立のために激烈な生活上の戦が続いた。一八二〇年昇天祭の日に、オステルオーデに住んでいた次兄が、全家族をつれ、全財産を提げて、フレイベルの事業に協力に來た。一八二五年までに、カイルハウ學園はその協力者、ミツデンドルフ、ラングクール、パー

ロブの献身的な協力を得て、その事業は最盛期に達し、児童数は五十六人にまでなつた。且つ、此の間に所謂カイルハウ小論文と云われる七つの論文が次々にフレイベルの手によつて發表せられ、一八二六年、四十四歳の時その主著、「人間教育」の大作が公にせられた。幼児教育の思想はその中に既に明らかにされている。しかしこの時すでにカイルハウの学園には衰頹の兆が見えていた。即ちその原因は、一つには政府がこの学園に自由主義、社会主義の嫌疑をかけたこと、二つには経営難であつたことが考えられる。この間にあつてもフレイベルの教育に賛成し、絶大な支持を与えるものもあつたが、大勢は如何ともし難く、一八二九年には僅かに生徒六人に減じてしまつた。フレイベルの此の間の失意と焦燥は察するに難くない。しかし彼はかかる事情にあつて毫も自己の所信を曲げず頑なと思われるまでに、自己の真理を確信し、その鋒先はむしろ社会に向けられた。彼は自伝において次のように述べている。「人間であれという要求は……まだ一般の人々には余りに大袈裟で、理解が出来ないように私には思われた。……独逸人になれとかいう要求でさえ、既に余りに大袈裟過ぎて余りにも理解が出来にくかつた。何故かと云えば誰でも次のように云うからである。葺が葺である如く、私は私の生れつき既に独逸人である。それになる爲に或いはそれの爲に、果して尙お多くの教育が必要であらうか——況や

人間になる爲に多くの教育が必要であるというにおいておやであると。」彼がもしも「召使や下女、或いは靴屋や裁縫師を、或いは商人や実業家を、或いは軍人を、いやいつそのことに貴族をも只管に養成する学校として広告したら、」彼の教育所は有用と認められ「私も世界と国家とに認められる人間になつたかもしれない。而も若し私が人生と国家との機械になつて、機械を彫刻したり模塑したりしたならば、尙お更ら二重にそうなつたかもしれない。併し私は只管に自由な思索的な、活動的な人間を作りたいと思つた。ところが自己の爲にまた子供の爲に自由で、思索的で、そして自己活動的な者が誰かあるであらうか。自由で、思索的で、自己活動的な人間を認め得る者が誰かあるであらうか。だから独逸人を教育するということが既に愚かなことで、況や人間を教育するということこれはこれにも増して愚かなことであつたらう！」

當時の一般の教育に対する関心と水準を考え合わせる時、フレイベルの苦衷は察するに難くない。

かかる苦境の中にあつて、マイニンゲン公にあてた書簡が一八二七年に、フリードリッヒクラウゼにあてた書簡が一八二八年に書かれている。何れも自伝の形で苦窮を訴えたものである。

カイルハウの学園の経営難その極に達し、一八二九年、マイニンゲン公の援助によりヘルバに国民学校の設立を計画す

るが、種々の事情から挫折する。此の間にあつてもカイルハウは日に日に衰運に傾き、遂にフレীবेलは後事をミッデンドルフに託して、瑞西のワルテンゼーに、続いてウィルソーに学園設立を計画するが、何れも目標を達し得ず、茲に、一八三五年五月末、彼はベルン州政府の招請に応じて、ブルクドルフの孤児院長となつた。此の間に彼の教育思想は次第に円熟し、今や次の事業の内的な基礎が固められつつあつたのである。

翌年には「一八三六年は生活の革新を要す」と題する一文を草し家庭教育の重要性を説いた。

たまたまウィルヘルミネ夫人が健康を害したのを機会に一八三六年五月十四日、彼はブルクドルフを去り、カイルハウに帰つたが、翌年一月、居をブランケンブルクに移し、いよいよ、非常な熱意を以て、彼の教育思想の実現に邁進する。

一八三七年、彼はここで、彼の教育思想になる教育用遊具の製造を企図し、「自己教授と自己啓発への直観教授研究所」と命名した。いよいよ生涯の仕事たる幼児教育にのりだすのである。フレীবेल五十五歳の時である。翌年に入つてから遊具の製造は実際に盛に行われ、その遊具は当時、「幼児少年用遊戯及び作業園」と命名された。後の恩物である。それと共にこの研究所も「幼児少年作業活動教養研究所」と改名せられた。乍而此の機関は名前によつても分るように、單なる遊

具の製造を事とするのではなくて、その遊具は子供の精神の働らきに材料を与えるための媒介物であり、あくまでも自己活動による教育事業を目指していた。これから約二年間、彼は此の遊具の普及と、彼の教育理念の宣伝のために、各地を巡歴して講演旅行に費した。その間に一八三九年三月、元来蒲柳の質であるウィルヘルミネ夫人が病死した。フレীবेलはひどく悲み、死を悼んで次の如く云つてゐる。

「仮令蒲柳の質とは云え、尙おも彼女は精神において聴く愛において強き、主婦らしい内助の力となることが出来た。カイルハウの学園において、ウィリザウの学園において、ブルクドルフの学園において、そうして最後にはまた幼児の教養に捧げたブランケンブルクにおける学園において。人類の幸福に対する愛は彼女の強味であり、神が彼女に任せた、子供に対する忠実な世話は彼女の喜悅であり、彼女の夫がその全生涯を淨化した、愛に満ちたる仕事は彼女の賜物であつた。」と。

## 九 幼児教育者

その後暫らくの月を経て後彼は、ブランケンブルクに幼児教育者指導者講習会を始め、同時にここに四五十人の幼児が集められて毎日指導がなされ、これを「遊戯及び作業所」と



呼んだ。正に一八三九年六月一日であり、これが幼稚園の濫傷である。

此の幼児を集めて教育する場所に何か相應しい名前を附けたいものと彼は久しく考えていたが、一八四〇年、或る晴れ渡つた春の日、ミッデンドルフ達とチューリンゲンの森をカイルハウからブランケンブルクに通ずる峠路を歩み乍ら、ブランケンブルクの町を見おろせる所に差し加つた。ブランケンブルクの勝景が大きな花園のようにうららかな日の光に照り輝いているのを見て、彼は突然叫んだ。「これだこれだ、キンダーガルテン（幼稚園）、これこそ新施設の名称として定まつた。」と。そして此の年の五月一日から、「遊戯及び作業教育所」は「幼稚園」と呼ばれるようになった。彼の目指しているものは、困苦しい子供の教育所ではなくして、文字通り、「子供の園」だつたのである。

迂余曲折を経て育まれて来た彼の教育理念は、今や子供の園、幼稚園において実を結んだ。久しく彼の抱いていた理想の教材は恩物によつて形を与えられ、それを利用して人間の教育をする場所は幼稚園に見出された。彼の齢も考齡に入ると共に、その思想は円熟の度を加えていつた。

幼児教育の指導講習を受けるものは、初めは男教員が多かつたが、フレーベルは幼児の保育と女性の使命、子供の教育と母親の使命とを深く結びつけて、考えるに至つて女性の教

育ということ深く考えざるを得なくなつた。一八四〇年六月二十八日、グーテンブルクの活版術発明四百年記念祭を祝して、一般独逸幼稚園の設立を計画し、その創立記念の式辭として幼児教育と保姆養成所の必要を論じ、参集の女性に多大の感銘を与えた。彼の叫びは正に一般独逸の全女性に向けられたものであつた。一八四四年には、彼の珠玉的作品、母の歌と愛撫の歌が美しくい絵入りで出版せられた。彼の母性教育の熱意と、豊富な心情とは此の一篇の中に結晶している。彼にとつては、今や此の一般独逸幼稚園を普及させ、各処に子供の園を実現することが畢生の目標となつた。併し乍ら現実は容易すくはその普及を許さなかつた。彼は各地において幼児教育思想を講演し、実演して歩き、一八四七年には国内に七つの幼稚園が設立されるに至つた。

## 十 リーベンスタイン

此の彼の教育理念の普及に忙しい日々にあつて、彼は常に幼なき子たちの友となることを忘れず、子供達との生活の中に浸ることを最大の喜びとしていた。彼の純粹な魂は老いて愈々童心に近づいていつた。リーベンシュタインに近い丘の上で、子供達と共に遊戯をし、歌を歌っている老フレーベルの姿は、マレンホルツ、ビュロー夫人によつて、詳細に描

写されている。

一八五一年六月、フレーベルは、教え子ルイゼ、レヴィン嬢と再婚した。彼女が以前から彼のために献身的に働いていたが、この後、フレーベルの最晩年を、優しい愛情をもつて世話をする事となつた。苦惱多きフレーベルは、晩年に至つて漸やくその生活も事業も安定するかと見えたのであるが、その年の八月、突如として、プロシヤ政府による幼稚園禁止令が發布された。彼の驚きは大きかつた。その原因は、彼の甥カールフレーベルと、彼とを取り違えて、カールが社会主義運動に関係していたために、フレーベルの幼稚園は、社会主義的無神論的傾向を有すると做されたのである。あらゆる運動は徒勞に帰し、彼の畢生の事業は、誤解のために投げられた一石によつて、全く根絶したかに見えた。フレーベルの失意と落胆は大きかつた。

それでも翌一八五二年、チオドル・ホフマンの議長のもとにゴータに開会された一般独逸教員會議の席上では、彼が入場するや、全會員は恰も一人の人間のように起立した。全独逸は、彼の偉大なる業績を認めていたのである。同年四月二十一日、彼の満七十歳の誕生日が、マリエンタールにおいて盛大に行なわれた。子供達は種々の催しを行い、彼らの手によつて、月桂樹が彼の頭に飾られた。

併し乍ら、幼稚園禁止令は彼の心に大きな傷を与え、その

ためにフレーベルは健康を害して病の床に就く身となつていた。そしてそれから二カ月後、一八五二年六月二十一日、ルイゼ・レヴィン夫人、親友ミッデンドルフ、その他の生徒達に見守られて、その苦難多き生涯の幕を閉じた。

墓碑はマリエンタールに近いシュワイナに建てられた。それは恩物の球と円錐と立方体とを重ねた構図であり、その墓碑には、フレーベルの愛句「いざや我等を我等が子供に生きしめよ。」「Kommt, Lasst uns unsern Kinder leben.」の句が刻まれている。

☆ ☆ ☆

此の簡単な傳記を記すに當つて、私は全面的に、長田新氏譯「フレーベル自傳」(岩波書店刊行、昭和十二年)を参照した。文中かきの中の部分は、長田氏譯文そのまゝを引用した個處である。その他莊司雅子氏著「フレーベルの教育學」(株式會社フレーベル館昭和二十五年)及び倉橋惣三氏著「フレーベル」(大教育家文庫、岩波書店、昭和十四年)を適宜参照、引用した。煩雜を避けるため一々引用個處を明瞭にしてないが、御諒承願いたい。